

## 韓国の歴史教科書にみる近代日本像(1)

清 田 善 樹

### 한국 역사교과서에 나타난 근대일본상

기요따 요시키

개 요

이 논문에서 저는 중학교 국사교과서에 근대일본이 어떻게 기술되고 있는가를 검토하였다. 근대에 있어서는 일본은 침략자이외의 아무것도 아니다. 강화도사건을 위시하여 을미사변이나 을사조약강요등 일본은 한국과 한국민에게 상상도 할 수 없는 정도의 고통하고 손해를 주었다.

그러니까, 일본에서 많은 사람들이 다음과 같이 생각하고 있을 것이다. 즉 한국에서는 역사교과서를 사용해서 반일교육을 실시하고 있다고 주장하는 사람이 있다. 그러나 교과서를 일견하면 그런 주장은 근거가 없는 잘못된 주장이라고 알 수 있다.

실제 교과서의 일본관계기사는 감정적으로 기술되지 않고 객관적인 태도로 역사 사실만을 기술되고 있다.

우리는 한국의 교과서를 통해서 일본근대사에 대한 인식을 새로이 할 수 있다.

1993年 9月29日受理

はじめに

韓国で現在使用されている国史(韓国史)の教科書の中に、日本の歴史がどのように記述されているかという観点から、検討したことがあった<sup>(1)</sup>。しかし、その作業は前近代までで、以後中断している。韓国の教科書が、近代以降のわが国についてどのように記述しているか、大いに気になっていたのであるが、そして近代以降についても教科書を読み続けはしたけれども、以下の三つの理由により、あえて作業を続行することを控えていた。

その第一の理由は、私自身が近代史に暗く、近代以降の日韓関係について基礎的な勉強をしなければならなかったことである。

第二には、当該時期が日本による韓国の植民地化と植民地支配の時期にあたっていること

だ。いわゆる「教科書問題」でも、特に問題になるのはこの時期の歴史的評価についてである。また、韓国における「反日教育」は、この時期の歴史教育において著しい、と考える人が日本では多いようで、客観的に論じにくい雰囲気になっている<sup>(2)</sup>。

第三には、この数年間の韓国における政治の民主化の進展にともなって、何らかの変化が教科書の記述にも現れてくるのではないかと思われたからである。しかし、この件については、もう少し時間がたたないと具体的な変化は認められないだろう。

日本の近世にあたる時期、朝鮮も日本と同じく鎖国状態にあった。日本は、長崎の出島におけるオランダとの貿易を通じて、朝鮮は、清国に派遣する使者を通じて西洋の事情を知るのみであった。日本は、1853年のペリーの浦賀来航により、鎖国状態を打破された。一方、朝鮮もほぼ同時期に西洋諸国と接触を持ったが開国通商にいたらず、むしろ逆にますます鎖国体制を強化した。欧米諸国との接触の時期と接触のしかた、欧米の文明受容に対する態度の違いによって、その後の両国の歩みが異なったのである。そのことをどうとらえるかが、この時期の歴史叙述にとって大切である。「先に近代化に成功した日本が、未だ遅れた野蛮な状態にある朝鮮を開国させてやって、近代文明の恩恵に浴させてやったのである」といった式の議論がときに聞かれるが、この時期の日本の歴史教科書の記述については、内容の歪曲もさることながら、それよりもこの時期の歴史に対する我々日本人の態度の方がむしろ重要視されねばならないだろう。例えば、1981年の所謂「教科書問題」を契機に日本の高等学校の日本史教科書の内容を検討した李明花氏は、日本の教科書について次のように指摘している<sup>(3)</sup>。

「日本人達の今日の歴史像は、戦前に形成されたアジア諸民族に対する脱亜論的優越意識をそのまま継承していて、特に韓国に対して偏見と歪曲された歴史像はかなりその根が深く、単純に正されうる問題ではないようだ。日本人の韓国人に対する優越意識を越えた偏見と蔑視感の造成は、明治維新で近代化に成功して、すぐ引き続いて大陸に侵略をはじめた彼らの戦争の歴史と時を同じくする。この過程において、相手民族に対する偏見と蔑視感を吹き込み、『野蛮状態から文明への手助け』という侵略の当為性を求めるようだ。これを注入させる道具として、学校教育が利用され、精神教育を通じた徹底した洗脳化は、戦争が終わった後にも子孫に受け継がれて体質化された。」

「日本の歴史教科書の歪曲問題は、検定の是非とともに日本の国内のみならず周辺国家にまでも激しい非難の対象となっている。それは、教科書の記述が学問研究の水準におよんでいなくて、特に韓国に関係する記述は、研究成果をまったく反映していないまま戦前の歴史観に停まっている実情だ。教科書反動を何度も経て、若干の語意の変化と内容の転化が加えられただけで戦前の皇国史観を踏襲しているようだ。教科書の至る所に同じ様に大国中心、支配者中心、強者中心的世界観が窺われ、戦前の進化論的な弱肉強食・適者生存の自然法則を人間の歴史にそのまま適用する史観に停まっている事をみる。このような

世界観の形成に障害を与えているので、その上に韓国史像の歪曲はたやすく是正されそうもない。」

李明花氏が指摘するところは、我々日本人のうちに今なお存在し続けている、韓国に対するいわれなき優越感や大国中心、支配者中心、強者中心の世界観が所謂「教科書問題」の元凶だということである。これから、韓国の中学校の教科書に現れた近代日本の姿を見ていくにあたって、李明花氏の指摘を忘れないようにしていきたい。

ところで、作業を中断しているうちに、韓国の教科書の記述は少しずつ変わっていた。例えば、古代史に関する記述で、高松塚古墳の所在地が誤って記されていたが、これはその後の版で削除された。その他の記述も、特にこれといった誤りがない部分でも、すこしずつ表現や記述の順序が変わっている場合がある。したがって、今回小稿で検討した教科書は、前3回の近世以前までの記述を検討した際に使用した教科書とは、若干記述が異なっている。本来ならば、同一の教科書を用いて筋を通すべきであると思うが、出来るだけ新しい内容で、現時点における内容を検討したいと思ったので、敢えて前稿までとは版が異なる教科書を使用した次第である。ちなみに、前稿まで使用したのは1987年度版中学校国史科教科書であったが、今回は1993年度版の中学校用国史科教科書下巻を使用した。なお、小稿の目的は、韓国の中学校教科書の中に日本がどのように描かれているかを知ろうとするものである。日本の中学校の歴史教科書の記述と比較してみようとする事は、目的としていない。

1993年版中学校用国史科教科書は、1987年度版に比べ版形が一回り大きくなった<sup>(9)</sup>。

下巻の目次を示すと次のようである。

#### I. 朝鮮社会のあらたな動き

1. 勢道の改革と政治の変化
2. 経済成長と社会の変化
3. 実学の発達
4. 文芸活動のあらたな傾向
5. 社会の動揺と宗教のあらたな気運

#### II. 近代社会の成長

1. 興宣大院君の政治
2. 開化運動と斥邪運動
3. 東学農民運動と甲午改革
4. 独立協会と大韓帝国
5. 国権被奪と義兵戦争
6. 近代文化の成長と愛国啓蒙運動
7. 近代施設と経済生活の変化

#### III. 民族独立運動の展開

1. 独立運動の強化
  2. 3. 1 運動
  3. 独立運動の発展
  4. 民族文化守護運動
- IV. 現代社会の発展
1. 大韓民国政府の樹立
  2. 民族分断の試練
  3. 大韓民国の発展

## 一. 近代社会の成長

### 1. 興宣大院君の政治

日本と朝鮮との間に、江戸幕府と結ばれていた善隣関係とは異なる、あらたな関係が生ずるのは19世紀後半からである。この19世紀中葉以降について、教科書は、次のように概観する（II. 近代社会の成長）。

19世紀中葉の朝鮮社会は、農民たちの抵抗運動がいたるところで起こり、西洋の勢力が威嚇を加えてくるなど、内外とも困難に直面した。このような時に、政権を握った興宣大院君は、王権の再確立を企てるなど、果敢な改革政治をくりひろげたが、根本的な解決は、むつかしかった。

朝鮮は、外勢の侵略的接近に対応して強硬に張り合ったが、国内外情勢の変動により、開港をするようになった。そうして、長期間の儒教的伝統社会から、新たな近代社会への転換が促進された。

しかし、東学思想、開化思想、衛正斥邪思想が互いにもつれ合ううちに、開化と保守の対立がひどくなり、清、日本、ロシアなどの列強の浸透によって、自主的近代化が順調に推進され得なかった。結局、我が民族は、武力を全面に押し立てた日本帝国主義の侵略により国を失ってしまった。

19世紀中葉は、朝鮮国内の矛盾が激化しつつあった時期であるとともに、帝国主義諸国による侵略の危機に直面していた時期でもあった。日本が朝鮮を植民地としてしまうのは20世紀に入ってからのものであったが、すでにこの時期から植民地化の危険性があったとみている。ただし、19世紀中葉の時点においては、日本は未だ鎖国をしており、且つ朝鮮との関係は良好であったのであり、海外からの危機はフランスとアメリカ合衆国からのものであった。

朝鮮王朝は長らく朝廷内の派閥抗争が続き、王の外戚にあたる安東金氏による長年の勢道政治が腐敗の極致に達しており、政治の基盤は揺るいでいた。このような時期に政治の実権を掌握したのが、幼くして即位した国王高宗の父興宣大院君<sup>(5)</sup>であった。興宣大院君については、わが国の歴史教科書では、単に頑固な保守的政治家としてしかとらえられていない。し

かし、彼のおこなった政治は確かに極めて保守色の強いものであったが、対国内・国外政策ともこの時期の朝鮮の進路にとってきわめて重要な意味をもっていたのである。韓国の教科書では、特に一章を設けて「興宣大院君の政治」としている。興宣大院君政権下では、1886年の丙寅洋擾、1871年の辛未洋擾と呼ばれる二度にわたる欧米諸国の攻撃を受けたため、外国を排斥する斥邪思想が高まった。興宣大院君は「洋夷侵犯非戦則和主売国」と記した斥邪碑を各地にたてて国民の斥邪意識を高揚させようとした。日本で維新政府が成立し、朝鮮に対して新政府の成立の通告を行い、あらたな日朝関係樹立の交渉を行なおうとしたのは、このように朝鮮側が欧米諸国に対して強い警戒心を抱いている時期だったのである。1871年の辛未洋擾の際には、江華島へ向かうアメリカ艦隊は、日本の長崎から朝鮮に向かった。しかし、教科書では特にそのことに言及していない。

## 2. 開化運動と斥邪運動

近代日本が朝鮮に対して果たした最初の役割は、鎖国状態にあった朝鮮をして開港せしめたことであった。朝鮮の開港の事情については、次のように記している。

興宣大院君は、改革政治を実施して相当の成果をあげたが、それに反対する勢力によって10年だけで引退し、閔氏の勢力が執権するようになった。このとき日本は、雲揚号事件をおこして、これを問題として、通商条約の締結を強要した。この頃、すでにわが国でも、朴珪寿等による開港を支持する主張が起こっていたため、朝鮮政府は日本と江華島条約を結んだ。(P53～P54)

江華島条約<sup>(6)</sup>の締結について、雲揚号事件の説明や日本側の行為が不当なものであったのか否かについてはまったく触れることなく（「雲揚号事件をおこし」といってはいるが）、事実を簡単に述べるにとどめている。また、朝鮮側にも鎖国体制を打破しようとする動きがあった事を述べている点は注目される。

江華島条約の評価については、次のように述べている。

江華島条約は、我国最初の近代的条約であったが、朝鮮に不利な内容になった不平等条約であった。これを契機にして、釜山、元山、仁川の三つの港を開港し、日本はソウルに公使館を設置して朝鮮にその勢力を浸透させ始めた。(P54)

江華島条約は、朝鮮が最初に結んだ近代法的な条約であったこと、さらに、この不平等条約の締結が後に日本による侵略につながっていくことをのべている。江華島条約が韓国最初の近代的な法であるというのは、教科書以外の、例えば注(6)で掲げた諸書でも触れていることがらである。ひるがえって日本の教科書では、日米和親条約を日本最初の近代的な法と説明する事はない。

日本の力による開港以降、朝鮮は次々と他の国々とも条約を結んでいった。

一方、当時日本とロシア勢力の浸透を防ぐためにわが国がアメリカと修交をしなければ

ならないという意見が起こり、朝鮮政府は西洋の諸国のうちで最初にアメリカと条約を締結した(1882)。この後続いて、英国、ドイツ、ロシア、フランス等の諸国と順に条約を結んだ。(P54)

朝鮮が欧米諸国と条約を結んだのは、客観的には外圧に屈したものであるべきであろうが、朝鮮の自主的判断に基づいたものであったと述べられている。どの程度朝鮮の自主性が発揮されていたのかは疑問であるとしても、外国と条約を結ぶにいたった国内の条件を説明しているものとみるべきであろう。

朝鮮は、江華島条約締結の後、近代国家への道を歩みはじめた。そしてその道には、いつも日本の経済力と軍事力が影を落としていた。それゆえ、近代の記述では、どのページにも必ず一ヶ所は日本に言及した部分があるといっても過言ではない。近代国家へと脱皮をはかる朝鮮は、日本への遣使、政治機構改革、軍事改革等一連の開化政策を展開した。

開化政策 江華島条約を結んだ後、政府は、金綺秀と金弘集を修信使として日本に送り、日本の発展した様子と世界の動きを注意して見るようにする一方、西洋の近代文明を受入れ、国を確固たるものにしようとする開化政策を推進していった。

開化政策を推進しながら、政府は、これを後押しする機構として統理機務衙門を設置したが、これは我国最初の近代的政治機構であった。

その後、政府は日本の近代文物をさらに深く探るために、視察団を派遣する一方、清へも留学生を送って、近代技術を学ぶようにした。

そうして、朴定陽、洪英植等の若い官吏で構成された紳士遊覧団が日本にわたり、財政、教育等のいろいろな文物制度を観察し、領選使の金允植が率いる留学生たちが清へ行って、近代武器の製造技術と軍事訓練法を習ってきた。

いっぽう、わが国は、世界の諸国と相対しながら、我々の国防力を強化しなければならないという必要性を感じ、別技軍という新式軍隊を組織した。別技軍は、日本から入ってきた新しい武器で新式の軍事訓練を受けた。(P55～P56)

江華島条約とそれ以後に結んだ条約で朝鮮に開港させた日本は、経済的、軍事的に朝鮮に進出していった。しかし、朝鮮国内では、フランスが江華島を侵犯した丙寅洋擾を契機に、西洋との交渉に反対し伝統文化と秩序を守ろうとする衛正斥邪が、李恒老や奇貞鎮等によって唱えられていたのが、開港後さらに強く主張されるようになった。その運動の担い手は儒生で、開港後急激に変化し伝統文化を破壊する社会の動きに、自らの支配基盤の動揺を感じ取ったからであった。そのうえ、日本の朝鮮進出は、朝鮮の国民の生活を不安定なものにしたため、儒生の動きは彼らの不満をも代弁することになった。とはいっても、衛正斥邪論は朝鮮人にとってかならずしも肯定的にのみ評価されるものでもなかった。衛正斥邪論につ

いて、教科書は以下のように、民族意識の点では評価できても、世の中の動きについていけなかった点では評価できないという。

衛正斥邪論は、西洋列強と日本の侵略を防いで、わが国を守らなければならないという民族意識と、我々の伝統文化が優秀であるという文化的自負心を基盤にしたものだった。しかしこれは、変化している世界情勢の流れに従えなかった点がありもした。(P57)

儒教的価値観にとらわれて、時代の動きに対応できなかったとマイナスの評価もされる衛正斥邪論ではあったが、鎖国体制をやめてからの朝鮮の状態は、それを時代遅れと切って捨てることを許さないものであった。朝鮮の内政・軍事に日本がかかわりを深めていくに連れて、朝鮮官民の不満が日本に向けられるようになったからである。朝鮮政府が実施する開化政策と日本の進出に対する不満がいきなり爆発した事件が、壬午軍乱である。

壬午軍乱 政府の開化政策が実施される過程において、開化論と斥邪論の対立、閔氏政権と興宣大院勢力の葛藤、そして日本勢力の浸透に対する国民の反発等が起こった。

このころ、旧式の軍隊は新設された別技軍に比べて劣った待遇を受けていた。特に、旧式軍の軍人たちは、少ない給料までも長らく受け取る事ができず、政権を握っている閔氏政権に対する不満が高まっていった。

そのような中、滞った給料の一部として受け取った米に、砂と糠が混ぜてあったので、彼らは積もり積もった不満を爆発させた。旧式軍の軍人たちは、軍乱を起こし、怨声が高かった政府高官たちを殺し、日本公使館を焼き払い、別技軍の日本人軍事教官を殺害した(1882)。これを契機にして、追いやられていた興宣大院君がふたたび政権を握り、この間に政府が実施してきた開化政策をすべてもとに戻してしまった。

しかしこれにつけこんで日本が軍隊を派遣しようとするや、わが国に勢力を展開しようと機会をねらっていた清が軍隊を送り興宣大院君を拉致して行き、閔氏勢力がまた政権を握るようにした。そうして清は、外交顧問等を派遣し、わが国の内政に干渉しはじめた。(P57~P58)

公使館焼き討ちを口実に派兵しようとする日本は、朝鮮において徐々に侵略者としての姿をあらわしはじめたのであるが、この時点ではまだ清に対抗しうる勢力にはなっていなかった。しかし、日本は着実に朝鮮への影響力を強めていき、朝鮮国内の開化派と組んで地歩を固めようとした。それがまた清との対立を生み出し、後の日清戦争の原因となったのである。

甲申政変 壬後軍乱後、閔氏の勢力が再び政権を握るようになったが、清の内政干渉を受けるようになった。以後の閔氏政権は、開化政策に消極的であった。これに対して、

開化団は清の干渉から脱して自主的に、そうして積極的に開化を推進しようとした。開化団の中心人物は、金玉均、朴泳孝、洪英植等だったが、彼らは日本と往来しながらかの地で発展した様子を見て、わが国もすぐに近代化をしなければならないと考えた。

そうして、彼ら開化団は、郵政局開設祝賀の宴会を利用して政変を起こしたが（1884）、これを甲申政変といった。彼らは新しい政府を構成して、改革政治を推進しようとした。その改革の内容は、政治的、社会的、経済的弊害を改め、自主的な近代国家としての発展を図ろうとするものであった。しかし、日本軍の支援を受けることにしていた甲申政変は、清軍の介入によって、三日間だけで失敗に終わってしまった。

甲申政変が失敗した理由は、近代国家への発展に対する国民的な自覚が不足していたのに、少数の開化団の人々が、日本をあまりにも信頼しすぎて改革を急いだためであった。（P58～P59）

甲申政変は、急進的に朝鮮の開化を考える金玉均らを利用して、日本が朝鮮にその勢力を拡張させようとはかったものであったが、清国が武力介入したため日本軍が撤退し、見捨てられた開化派が孤立化して失敗に帰したものであった。この事件を契機に、日本は軍事編成を内乱鎮圧を想定したものから外征用に変更し、清国に対抗しうるように、海軍の艦艇や陸軍の員数装備をほぼ10年で倍増することとした。それから10年後、軍備増強の計画が実現されなかった日本は、近代日本がはじめて経験した対外戦争たる日清戦争を戦うことになるのである。朝鮮にとっては、開化運動史上大きな意味を持つ事件であったが、教科書が述べるように、開化思想が大衆に理解される以前に、少数の開化派が大衆の支持を受けることを考えないで外部の勢力と組んだために失敗したという点で、開化運動の未熟さを露呈したというべきものであった。この時期、大衆は、開港以降の生活の苦しさから外国に対して好感を抱いておらず、外国の力をあてにした開化派の動きはむしろ嫌悪すべきものであったのである。壬午軍乱、甲申政変と、日本の評判は朝鮮において確実に悪くなっていき、逆に日本の侵略的な動きが明確になっていったのである。

開港から甲申政変までの時期における国内政治の改革と外国との接し方が、以後の朝鮮の方向を決定したといえる。この時期について教科書は、次のようにまとめをしている。

#### 学習整理

1. 開化思想は、中国を通じて紹介された、西洋の文物に関する書籍の影響によって形成され始めた。
2. 江華島条約は、わが国最初の近代的条約であるが、日本の武力的強圧によって結んだ不平等条約であった。
3. 開化以後、政府は開化政策を実施し、近代化を推進したが、結果的に帝国主義列強



の侵入に直面するようになった。

4. 衛正斥邪運動は、外勢の侵略に抵抗して民族の自主性と伝統文化を守ろうとするものであった。
5. 甲申政変は、開化団が自主的近代国家を作るために起こしたものであったが、国民的支持を得られず、失敗した。(P61)

### 3. 東学農民運動と甲午改革

甲申政変以後、朝鮮における日本と清との対立はますます激化していったが、直接的な衝突はなかった。この間、日本は着実に軍備の増強に努めてきたが、朝鮮に出兵するにいたらず、その機会をうかがい続けていたのである。朝鮮国内では、内政の混乱から、農民の生活が悪化しており、政府に対する武力蜂起さえ起こった。農民の生活が悪化していった主たる原因は、開港以後日本の商人が朝鮮に進出し、農村で行われていた家内工業を壊滅させ、日本の商品が大量に流入したことと、農産物が日本に持ち去られたためであった。甲申政変の後の約10年間を、教科書はつぎのように概観する。

#### 学習概要

開港以後、日本の経済的浸透が継続し、朝鮮の農村社会は大きな困難を味わうこととなった。しかし、政府は、農民たちの困難を解決できる改革を推進することができなかったのみならず、外勢の浸透にも効果的に対処できなかった。

このような中、農民たちは政治の改革を主張し、外勢の侵略に反対する大規模の東学農民運動を起した。

東学農民運動を契機に、政府は、甲午改革を推進して近代国家への発展を志向した。(P62)

上の学習概要にも見られるように、朝鮮に対する侵略者としての日本がしだいにその姿をあらわしはじめた。この単元に設定された学習問題にも、「日本」の語が増えはじめる。

#### 学習問題

1. 朝鮮に対する日本の経済的侵略は、どのように進行されたか。
2. 東学農民運動は、どのような性格を持っていて、成功しなかった理由は何であったか。
3. 東学農民運動は、国内外的にどのような影響を後世に残したか。
4. 甲午改革の重要な内容は何であり、何故に国民の支持を得られなかったのか。
5. 日本は、なぜ、乙未事変の蛮行を犯し、これに対して我が民族はどのように対処し

たのか。(P62)

この単元の学習問題にいたって、日本の「経済的侵略」「乙未事変の蛮行」といった語句が見られるようになる。特に乙未事変は、日本人の一団が朝鮮の王宮に乱入して王妃の閔妃を殺害、その上遺骸を焼くというまさに蛮行というほかのない事件である。後に伊藤博文を射殺した安重根も、射殺理由たる伊藤博文の罪状15カ条の第一番に王妃殺害をあげているほどである。

この単元の第一は、「列強の浸透」として、甲申政変後の日本、清国、ロシア、イギリスなどの帝国主義諸国が朝鮮をめぐり、それぞれの思惑によって行動するため、国際情勢が極めて複雑化したことを述べる。すなわち、沿海州に軍港を持ったロシアが積極的に南下政策を展開、それに警戒心を抱いたイギリスが朝鮮の巨文島を一時占領、また、朝鮮政府は清国の内政干渉から脱しようとしてロシアに接近したのである。そして、日本と清国とは対立を続けつつもイギリスとともにロシアの朝鮮への進出に警戒心を抱いていた。そんな中でも日本の朝鮮への経済進出はとだえることなく続き、とうとうここでは、「日本の経済的侵略」という小見出しが立つにいたる。

日本の経済的侵略 甲申政変で清の勢力に押され、政治的に後退させられた日本は、朝鮮に対する経済的浸透に力を注いだ。清国の商人たちも政治的勢力を背景にして経済的浸透を活発に展開して、日本の商人たちと競争した。日本商人たちは、英国産綿製品と日本で生産された日用品をわが国に持ち込み、高い価格で売り、わが国からは、米、大豆等の穀物と、金を安い価格で買い入れて日本に持っていった。このとき、多くの食料が日本に輸出されるや、わが国ではそれだけ食料が不足して、価格が高くなり、農民たちの生活が困難になっていった。

1893年のわが国の海外貿易量を調査した統計によれば、対日輸出が輸出全体の約90パーセント、輸入は約50パーセントを占めており、経済的浸透において、清国はそれ以上に日本の競争相手になりえないことを知りうる。

一方、日本商人たちによる商品の輸入で、わが国の商工業は大きな被害をうけた。このときの輸入商品は、いまだに古い方式で生産している我が国の商品に比べて優秀だったので、わが国の手工業は大きな打撃を受けざるをえなかった。特に、日本商人が持ち込んだ木綿は、わが国の農村の副業として盛行していた麻や木綿の生産に大きな打撃を与え、農民の収入は減少していった。

日本は、漁業においても侵略行為をしてきた。優秀な装備を備えた日本の漁船たちがわが国の漁場に出漁するので、わが国の漁民たちは大きな被害をうけた。(P64～P65)

引用が少し長くなったが、日本の経済的侵略については以上のように記述されている。なお、このページには、1877年から1882年までの対日貿易の輸出額と輸入額の統計表と、1893年の対日、対清、対ロシア貿易の輸出額、輸入額の統計が掲載されている。このように、教科書本文の記述においても、日本関係の記事が急増してくる。

日清戦争前の段階における日本の経済的侵略の具体的な動きの一つは、朝鮮から農産物を収奪することであった。朝鮮から大量の穀物を持ち出せば、持ち出した分だけ朝鮮の穀物が不足し、それだけ農民の生活が困窮するもととなった。日本への穀物搬出による農民の生活が深刻化したため、朝鮮側がとった処置が穀物の輸出を禁止する防穀令であった。日本の商人たちは、朝鮮側の処置によって多大な損害を被ったとして、日本政府を通じて朝鮮政府に法外な賠償を求めたのである。教科書は、このような防穀令をめぐる事情を説明した後の農村の状況と農民の動きについて、次のように述べている。

このような状況で、わが国の農民たちは外国の経済的侵略に反感を抱くようになり、適切な政策を立ててこれを打開できない政府と腐敗した官吏たちに対しても不満をもつようになった。

また、農村社会では、日本を排斥する気運が高まった。このような雰囲気の中で、農民たちは内政改革と外勢の排撃を要求して、これらの主張はとうとう東学農民運動としてあらわれた。(P65)

東学農民運動については、わが国では「東学党の乱」としてその名前はよく知られている。しかし、日清戦争のきっかけとなった事件としてのみ取り扱われがちで、朝鮮の農村社会の中で東学がどのような位置を占めていたのか、多くの農民に支持され、ついには清や日本の出兵すら引き起こすにいたった理由は何か、といったことがらについては注意が払われてこなかったように思われる。1894年の農民運動の原因の多くは、もちろん朝鮮の腐敗した官吏による悪政という内政問題も大きいですが、日本の経済的侵略によるという点については、教育の場では考慮されてこなかった。韓国の教科書では、東学農民運動に「東学勢力の成長」「東学農民運動」の二つの小見出しを立てて、2ページ半以上の紙数を費やして解説している<sup>(7)</sup>。1894年、地方官吏の不正に怒った農民たちが蜂起した。政府はこの事態を自身では鎮静化できず、清に軍隊の派遣を要請した。清が朝鮮に派兵をすると、日本もこれに対抗して軍隊を派遣しようとし、国内問題に外国が干渉することとなったのである。もとより農民たちは外国の勢力の干渉を望むものではなかったため、政治改革を約束する政府と妥協して運動を解散させた。しかし、政府が政治改革の約束を実行しないだけでなく、日本軍が朝鮮に派遣されてきたため、農民たちは再び決起しようとしたのである。

しかし、政府の約束がすぐになされず、のみならず日本軍の侵略的行動が強化されるや、東学農民軍は日本の侵略対抗しようと再び決起した。けれども、優秀な武器を持った官軍と日本軍に公州のウグムチで敗れて、全捧準等の指導者たちが生け捕りになり東学農民軍の第二次蜂起は失敗してしまった。(P68)

東学農民運動に対する評価は、つぎのように述べられている。

東学農民運動はたとえ失敗に帰そうとも、農民が主軸になり外勢に抵抗し、近代社会に前進する契機をつくった大規模の近代民族運動だという点で大きな意義を持っている。(P68)

ここで、近代社会に前進する契機といているのは、つぎにとりあげる甲午改革を指している。

甲午改革 東学農民運動を契機に、政府でも内政改革の必要性を感じるようになった。このような時、日本は清の勢力をわが国から追い出して、侵略の足場を固めるために、清と戦争を起こす一方、武力で威嚇して我が政府に内政改革を要求した。

政府では、金弘集を総理大臣にし、改革を実施する機構として軍国機務処を設置して政治、経済、社会の各分野にわたり改革を推進したが、これを甲午改革といった(1894)。甲午改革では、政府の組織を議政府と宮内部に分けて、議政府の下に8衙門をおき、科挙制度を廃止して新しく官吏任用法を制定した。また租税制度を改め、度量衡を統一し、身分制度を撤廃した。このような甲午改革の精神は、洪範十四条によくあらわれている。

甲午改革は、わが国の近代化の契機となっが、このような甲午改革の推進にもかかわらず、わが国の近代化が遅れたことは、その改革が請求に推進され、侵略の足場を固めようとする日本の干渉と妨害によって思い通りにならなかったからであった。

甲午改革は、日清開戦にあたり、日本が朝鮮の内政改革を主張して王宮を占拠、興宣大院君をかつぎだして金弘集を首班とする開化派政権をつくらせ、その内閣に実施させたものであった。朝鮮の近代化という点では、画期的な政策が次々に打ち出されていったが、日本軍の軍事力を背景に強行された改革ということは覆いがたく、開化政策そのものに対する国民の反感を買うこととなったのである。

日清戦争後の三国干渉によって日本の威信が低下し、日本の勢力は一時朝鮮から後退せざるをえなくなった。改革政治も、改革派が政府から追放されて頓挫してしまった。朝鮮における影響力の復活をさせた日本は、排日政策の元凶と目された閔妃を排除しようとして、日本公使三浦梧楼はソウル駐在の日本守備隊、巡查、壮士たちを動員して景福宮を襲撃させた。そして、閔妃を殺害した上死体を凌辱し石油をかけて焼却してしまった。さらにまたも

や興宣大院君をかつぎ出し、金弘集を首班とする親日開化政権を樹立した。これが乙未事変とよばれる事件である<sup>(8)</sup>。この事件を契機に成立した金弘集内閣は、より一層改革的な政策を打ち出していったが、皇帝がロシア公使館に移った後、金弘集が殺害されたため崩壊した。また、この事件後、反日義兵闘争が起こるようになったのである。

乙未事変 東学農民運動を契機に清・日両国の軍隊が介入し、この時わが国に対する侵略の機会をねらっていた日本は、清・日戦争を起した。

戦争は日本側の勝利に帰し、清・日両国の間に和議が成立して、下関条約が結ばれた。この条約を結ぶことにより、日本は、わが国で侵略の形勢をますます高くするようになり、清の遼東半島と大連を割譲され、その勢力が大きくなった。このような日本の勢力増大は、特にわが国と満州に対して野心を抱いていたロシアを刺激した。ロシアは、フランスおよびドイツと共同で遼東半島を清国に返還するように日本に圧力を加えた。よって日本は、三国干渉に屈伏して、遼東半島を清にかえしてやることになった。

日本が三国の圧力に屈伏するや、わが国の政界では日本の勢力を妨げるために、ロシアに接近しようとする動きが起こった。ここに日本は、彼らの勢力を挽回するために、軍隊を前に立てて王宮に侵入し、政界の背後で実力を行使していた明成皇后<sup>(9)</sup>を弑害する野蛮的な乙未事変を起した(1895)。

乙未改革と義兵の蜂起 乙未事変後、新たな内閣が組織され、この間中断していた改革が継続推進されたが、これを乙未改革といった。この時実施された改革には、陽暦の採用、種痘法と郵便制度の実施、断髪令の施行、年号の採用等が代表的なものであった。

乙未改革は、甲午改革の延長として推進された改革であったが、日本の侵略的干渉がひどくて、国民の反発が大きかった。

特に、明成皇后が殺害されたことに大いに憤慨していた国民は、断髪令が公布されるや、これに積極的に反対して立ち上がった。このような国民の動きは、日本の侵略勢力を妨げ、国と民族を守ろうとする抗日義兵運動としてあらわれた。当時の義兵は、儒学者たちが中心になって各地で立ち上がり、代表的な義兵将には李ソウン、柳麟錫等をあげることができる。

東学農民運動から甲午改革、乙未事変に至る時期は、日本が朝鮮に侵略の手を伸ばしはじめた時期でもあった。したがって、教科書のどのページにも必ず日本の名前が記されていて、韓国史の教科書でありながら日本の近代史を学んでいるような錯覚に陥ることがあるほどである。しかし、何ゆえか日清戦争に関する記述は皆無に近い。あるいは、日清戦争については世界史で学ことになっているのであろうか<sup>(10)</sup>。

この單元では、以下のように学習整理がなされている。

## 学習整理

1. 朝鮮は、米、大豆等の食料を安い価格で日本に奪われ、綿製品等日用品を高い価格で買入れるようになり、二重の大きな被害を受けた。
2. 東学農民運動は、外勢の侵略に抵抗して社会改革を主張した規模が大きな近代民族運動であったが、日本の侵略的介入で失敗してしまった。
3. 東学農民運動は、内には甲午改革、外には清・日戦争の契機となった。
4. 甲午改革派、政府組織の改革、身分制度の廃止など近代国家への発展を追求したが、日本の干渉のために思い通りにはならなかった。
5. 三国干渉後、日本は、野蛮的な乙未事変を起こして、以後日本の侵略に抵抗する義兵運動が各地で起こった。

以上見てきたところでは、この時期の日本はまず経済的に朝鮮に進出して朝鮮の市場をほぼ独占するようになり、つづいて政治的な支配権を強めるために朝鮮の開化派と手を組み、日本の軍事力を背景に開化派による政権を樹立させようとした。この段階においては、日本の朝鮮に対する支配は間接的であり、開化派による開化政策は一定程度自主性が認められるものであったといえることができる。開化派による政治は、朝鮮を近代国家に生まれ変わらせるためには避けることのできないものであった。それゆえ、開化派の政治に対しては、たとえ日本の強力な後押しがあったとはいえ、それ相応に評価されているのである。しかし、彼ら開化派の背後にいつも日本の存在があったということと、そして開化派の人々の意図はそうではなかったけれども、結果的には日本の朝鮮侵略に寄与してしまったということは、一連の開化政策を全面的に高く評価することを簡単には許されない。教科書の記述も、その点で苦勞しているように思われるのである。

この時期の記述から、日本の侵略という言葉が随所に見られるようになる。しかし、日本の行為に関する記述で気付くことは、事実には即した書き方があって、感情的な言葉使用が見られないことである。例えば、甲申政変のさいの日本の御都合主義、利用価値のなくなった開化派の人々に対する冷淡な仕打ち等については何ら触れられていない。ただ事実が、時間の経過にしたがって淡々と述べられているだけである。乙未事変についてはさすがに日本の「蛮行」と表現されているが、日本の公使によって計画され、日本軍をはじめ多数の日本人たちが王宮に乱入し、一国の王妃を斬殺した上死体を凌辱焼却した行為はまさに「蛮行」としかいいようがないが、教科書では「蛮行」の具体的な内容を一々あげるようなことはしていない。感情的な部分は、強く抑制されている。

日本に対する記述態度が予想外に抑制的にあるのに対して、一連の内政改革が失敗した理由を、単に日本による妨害があったからとしてすますことなく、改革を受け入れるべき国内にまだそれだけの条件が整っていなかったことを指摘している点も注目されよう。多くの

日本人は、韓国では極端な反日教育がなされていて、何でも悪いことは日本、朝鮮は一方的な被害者であるという式の教育が実施されているように思われがちのようであるが、実態は必ずしもそうではないのだ。

日本の侵略行為は、この後さらに一層激しくなっていく。そこでは、日本に対する記述態度はどのようになるのであろうか。

#### 4. 独立協会と大韓帝国

乙未事変後の朝鮮は、外交的には日本に対抗するためにロシアに接近し、国内では日本に抵抗する義兵の活動が活発化していった。一方、日清戦争の結果清国の影響力が後退したので、朝鮮は清国との宗属関係を完全に断ち切ったことを内外に示すために、国号を大韓帝国と改め、国王は皇帝を称するようになった。また、独立協会が自主独立の思想を国民の間に広め、開化思想は次第に一部の高級官僚や知識人に限定されることなく、広く国民のものになっていった。しかし、朝鮮や満州の支配をめぐる日本とロシアの対立はこの間にも一層深まっていたのであった。

この単元では、次のように概観している。

#### 学習概要

俄館播遷以後、外勢の干渉がひどくなる中で民族の自主独立を守ろうという民族運動が展開された。この先頭に立ったのが独立協会だった。

独立協会は、外勢の侵略から国家の自主権を守るための自主運動と、国民の自由権と参政権を要求する民権運動を推進したが、執権勢力の保守的な傾向と外勢の干渉のため大きな成果をあげられなかった。(P72)

この単元は、国号を大韓帝国とあらためたことや独立協会の活動、自主独立を目指す大衆の動きなど、国内問題が中心になっているため、学習概要では日本という名は直接的にはあられない。けれども、「外勢の干渉」の主たるものは日本のそれであり、俄館播遷の原因も日本の影響力から逃れるためであったのだから、日本の名がみえないからといってこの部分の記述の検討を無視するわけにはいかない。ここでの学習問題は、次のように設定されている。

#### 学習問題

1. 俄館播遷以後、朝鮮の政治はどのようであったか。
2. 独立協会の活動目標は何であり、啓蒙活動はどのように展開されたか。
3. 独立協会が開催した万民共同会で政府に要求したことは何か。

#### 4. 大韓帝国の国家的性格と改革の成果はどうであったか。

学習概要, 学習問題の冒頭に書かれている俄館播遷とは、閔妃が暗殺された後、宮廷内に影響力を増したロシアが親露勢力の廷臣たちと組んで、日本の威嚇を避けるために国王の高宗をロシア公使館に移した事件である。高宗がロシア公使館に移った後、金弘集は民衆に殺害されここに親日開化派内閣が崩壊し、かわって親露内閣が成立することとなった。しかし、国王が外国の公使館に避難しているというのは独立国として何とも体面が保てることではなく、日本の影響力からはある程度自由になったとはいえ、今度はロシアの影響力が大きくなってしまった。朝鮮の多くの利権をロシアが獲得してしまったのである。このようななかで、甲申政変後アメリカに亡命していた徐載弼が帰国して独立新聞を発刊した。独立新聞は、一般大衆を読者に想定して、漢字を一切用いずにハングルのみで発刊された新聞であった。また、独立協会も設立された。独立協会は、当初は官僚のみが構成員であったが、漸次一般国民にも広がっていった。そして独立協会は、自主、民権、自強運動を大衆に呼び掛け、万民共同会と称する大衆集会を開いて、ロシアの影響を排した政治改革等を訴えた。大衆の要求の高まりに危機感を抱いた保守派によって独立協会は解散されたが、朝鮮国内の大衆の自覚が大いに高まっていたことが注目される。

国民の遷宮要求が高まる中、高宗は一年振りで景雲宮に帰った。そして自主独立の国家であることを示すために、国号を大韓帝国と改め、独自の年号光武を制定したのである。光武年間に行われた改革を光武改革とよんでいるが、韓国が国家体制を整えようとしている間にも日本による侵略の手が確実に伸びていたのである。

#### 5. 国権被奪と義兵戦争

大韓帝国が成立したのが1897年。この時期、日本とロシアの対立はますます深まっていた。その対立がついに日露戦争に発展するのである。日本は、朝鮮における地歩を固めようと、大韓帝国から一つまた一つと国権を奪っていった。この単元の学習概要は以下のものである。

##### 学習概要

露・日戦争後、大韓帝国の外交権は強圧的に結ばされた乙巳条約によって日帝に剥奪された。

我が民族は、これに対抗して主権を守るための抗戦をいろいろな形で展開した。愛国志士たちの殉国が相次ぎ、高宗皇帝は海外に特使を派遣して日帝の侵略を国際的な協調で防ごうとした。

日帝の侵略に抵抗し武器を持って抗戦をくりひろげた義兵活動は、乙巳条約が強制的に締結されるや、ますます拡大した。特に、軍隊の強制解散をきっかけとして、義兵活動は



その組織と規模が大きくなり、義兵戦争に発展した。

いよいよ日帝による侵略が本格化し始めたため、この単元に設けられた学習問題5題はすべて日本がかかわっている。

### 学習問題

1. 日帝は、いかなる方法でわが国の国権を侵奪したか。
2. 我が民族は、乙巳条約反対闘争をどのように展開したか。
3. 義兵の救国抗争は、どのように展開されたか。
4. 日帝の侵略を妨げるための義士たちの活動は、どのようであったか。
5. 独島と間島に対する日帝の侵奪過程はどのようであったか。

日本の侵略が激しくなってきたことをうけて、これまで「日本」と表記されていたものの一部が「日帝」と表記されるようになる。この単元の最初の小見出しも「日帝の侵略」である。

以下、引用が長くなるが、日本の大韓帝国侵略がどのようになされていったのかをみることにしたい。

日帝の侵略と乙巳条約　ロシアは、三国干渉で成功したことによって満州にその勢力を養い、出てきてはわが国にまで浸透して各種の利権を奪っていった。ロシアは、南下政策を推進しつつ馬山浦に海軍基地を作ろうとまでした。このようなロシア勢力の増大に、ロシアと日本間の対立が激化した。

このとき、世界の各地でロシアと対立していた英国は、英・日同盟を結んで日本を助けてやった。とうとうロシアと日本の勢力対立は、露・日戦争を呼び起こした。

戦争が起こると、日本はわが国の各地域に軍隊を駐屯させて、韓・日議定書を強制して締結し、軍事上必要な場所を思い通りに使用した。そうして軍需物資を運ぶために、京釜線、京議線を敷設するなどわが国にたいする侵略をほしいままにした。

その後、日本は、戦況が彼らに有利になるや、わが国の政府に第一次韓・日協約の締結を強要した。この条約で日本は、わが国に外国人顧問をおき内政に干渉したが、財政、外交のみならず軍事、教育、警察の分野にまで顧問を任命した。このようなわけで、わが国の政治、外交に関する自主権は損傷を受けるようになった。

日本は、露・日戦争に勝利するや、本格的にわが国を侵略した。すなわち、一部の売国的な大臣たちを前面に立てて、高宗皇帝と内閣の反対にもかかわらず、軍隊を動員して大臣たちを威嚇する中、一方的に乙巳条約（第二次韓・日協約）を発表した。この条約は、わが国の外交権だけを日本が管掌するというものであったが、実際に日本は統監府を設置

して、外交のみならずわが国の政治全般に干渉した。(P80~P81)

乙巳条約反対運動 乙巳条約が強制によって締結されたという知らせが伝えられるや、これに反対する抗日運動が全国的に展開された。張志淵は、皇城新聞に「是日也放聲大哭」という論説を書いた。張志淵はこの文で、日本の侵略を責めると同時に、当時の売国大臣たちを激烈に非難した。帝国新聞、大韓毎日新報等も乙巳条約反対運動を詳細に報道しながら、民族精神と抗日運動を鼓吹させた。

また、李相高、崔益鉉等前職の高官と儒生たちも条約の無効を主張して、売国奴を糾弾する上訴を奉った。ソウルにある商家が撤市し、学生たちは自ら休学し、多くの人々が高宗皇帝に条約を破棄するように嘆願をしもした。一方、国運が傾いていくことを口惜しく恨めしく思った閔泳渙は、同胞に伝える遺書を残して自決した。(P81~P82)

学習問題の1番、「日帝はいかなる方法でわが国の国権を侵奪したか」に対する解答が「日帝の侵略と乙巳条約」である。日露戦争が起こると、日本は兵員と軍事物資の輸送、戦争遂行に必要な物資の確保のために、大韓帝国に対して日韓協約の締結を強要した。戦争に勝利すると、ロシアの勢力が駆逐されもはや競争相手のいなくなった大韓帝国をいよいよ自己の手中に納めようとして、ますます露骨に侵略の手を伸ばして行ったのである。乙巳条約締結の様子を述べたページには、「韓・日協約風刺図」と題する挿絵が載せられている。この図に添えられた説明の文句は漢字で「韓日脅約図」、ハングルで「日本が韓皇を威嚇して条約を無理強い」と書かれている。また、条約に署名している大臣たちの椅子にはハングルで「五賊等」と書かれており、大臣たちの後ろで剣を抜いて署名を強要している人物にはハングルで「倭兵」英語で「Japanese soldier」、大臣たちと向い合っている人物にはハングルで「倭賊」と書いた札が付けられている。「脅約」の文字に韓国人の乙巳条約に対する感情が、そして「倭賊」「倭兵」に日本人に対する気持ちがよくあらわされている。教書の本文はあくまでも事実を伝えようとしていて、感情的な言葉は排除されている。それだけになおさら「倭賊」「五賊」という、この挿絵の語りかけるものは大きい<sup>(11)</sup>。

乙巳条約によって、韓国は日本の保護国とされてしまった。官民挙げてこの条約に反対する中、高宗皇帝は条約の不法性を新聞を通じて宣言する一方、アメリカにはたらきかけて条約に反対する国際的な援助を要請したが、結局うまくいかなかった。

また、皇帝はオランダのヘイグで開催された第二回万国平和会議に李相高等三人の特使を派遣して日本の侵略行為を参加諸国に訴えようとしたが、日本の画策によって目的を果たせなかった。目的を果たせなかった李儁は、痛憤のあまり自決したのである。これをヘイグ特使事件あるいはヘイグ密使事件とよんでいるが、高宗皇帝はこの事件の責任を問われて退位に追い込まれた。

教科書では、この時自決した李儁を「李儁烈士は痛憤のあまり異国で殉国した」と記して

いる。これ以降、日本の侵略に抗して命を失った人々の行為を「殉国」と表現し、国に殉じた人物を「烈士」「義士」と呼ぶようになる。

以上に述べたヘイグ特使事件について、教科書は「ヘイグ特使」という小見出しで、約一頁分の字数を費やして説明している。

高宗皇帝によるヘイグ特使派遣が失敗した後、日本は韓国に対する圧迫をよりいっそう強めていった。その一連の動きが、高宗皇帝の退位強要、軍隊解散等であり、これに反対する活動も義兵闘争として活発化していったのである。日本に抵抗する活動は、義兵闘争にとどまらず、日本の侵略行為を支持したアメリカ人、乙巳条約に賛成した五人の大臣、いわゆる「乙巳五賊」、そして初代韓国統監の伊藤博文等の暗殺が相次いだ。これら暗殺行為は「義拳」と表現されている。以上のことがらについて教科書は、「軍隊解散」「義兵戦争」「義拳活動」という三つの小見出しのもと、詳細に説明を加えている。

**軍隊解散** 日本は、ヘイグ特使派遣を口実にして、彼らの侵略政策に反対してきた高宗皇帝を強制で退位させた。高宗皇帝の退位に対して国民たちは集会や示威を通じて反対運動を展開したが、日本軍は武力でこれを妨害した。

すぐに続いて、日本は韓・日協約の締結を強要して、各部の次官を日本人で任用し、引き続き、財政が困難であるという口実で大韓帝国の軍隊を強制的に解散させた。このとき、侍衛隊の第一大隊長の朴スンファンが軍隊解散に抗議して自決したが、これをきっかけとして侍衛隊の軍人たちはソウル市内で日本軍と市街戦をくりひろげ、原州、江華、忠州、晋州等の地の鎮衛隊も決起して日本軍と戦った。その後、彼らは各地で起こった義兵と合流して、主権守護のための抗日武装闘争を展開して行った。(P83～P84)

**義兵戦争** 日本の侵略に武力で対抗する義兵活動は、国権を守るための救国戦争へと展開された。

義兵の活動は、すでに乙未事変と断髮令に憤激して起こったことがあった。義兵は、最初には衛正斥邪精神を受け継いだ儒生たちが指導者になって、民衆がこれに力を合わせたのである。しかし、乙巳条約が強制によって締結されてからは、汎国民的な抗戦に展開された(以下省略)。(P84)

義兵活動について、この後も1ページあまりにわたって、各地における活動振りを詳しく説明し、朝鮮半島の各地で蜂起した義兵の規模と義兵将の名、蜂起した地名を示す地図が挿図として掲載されている。

義兵の活動については、次のように総括されている。

全国的に展開された義兵活動は、武器と先頭経験面でも劣勢であっただけでなく、日本

軍の大規模な作戦によって、だんだん弱められていった。しかし、一部の義兵部隊は、新たな抗戦根拠地を求めて満州と沿海州地域に移動し、そこで独立闘争を続けた。(P85)

かくして義兵の活動は、満州や沿海州に押し込められたのであるが、抵抗活動がこれで終息せしめられたわけではなく、この後も根気強く続けられて行ったのである。大規模な軍事行動が困難になると、韓国の独立の妨げになると考えられた人物に対する暗殺活動がそれにかわって活発になった。

**義拳活動** 義兵部隊の対日抗争が展開される間、侵略の元凶と売国奴を取り除いて民族の恨みをはらし、侵略勢力を妨げようとする義拳活動が国の内外で起こった。

日本政府の推薦でわが国に外交顧問としてやってきたアメリカ人スチーブンスが日本の我国侵略を支持する発言をするや、これに激憤した田明雲、張仁煥はアメリカのサンフランシスコで彼を射殺した。二義士の義拳は、アメリカにいるわが国の人々に祖国守護運動を起こさせる契機になったばかりではなく、わが国に対するアメリカ人たちの認識を新たにした。

そうして、安重根は、韓国侵略の元凶たる伊藤博文が大陸侵略を企てる目的でロシアの代表と談判するために満州のハルビンに到着すると、彼を射殺した(1909)。安重根の義拳は、日本の侵略に対する我が民族の強烈な独立精神をよくあらわすものである。

一方、国の内外では、親日的な人士に対する国民の怨声が高まって行った。特に、羅喆等は、五賊暗殺団を組織して売国奴の粛清を指導し、李在明等は日本の手先をしてきた李完用の暗殺を指導したが、傷を負わせただけで失敗してしまった。(P85～P87)

義拳活動の次には「独島と間島」として、韓国の領土が如何にして日本や清国に奪われて行ったのかを、歴史的にさかのぼって詳しく説明している。ここで言う「独島」は、日本では「竹島」と呼んでいる。周知の如く、竹島領有をめぐるのはいまだに日韓の間でその帰属が解決していない。北方領土をはじめとして、日本には未解決の領土問題がいくつか存在するが、それらの問題について教育の場で、生徒に対して歴史的経過を含めてきちんと説明されていないのではなかろうか。

この単元の学習整理は、以下のように五つにまとめられている。

#### 学習整理

1. 露・日戦争で勝利した日本は、乙巳条約を強制して締結した後、統監府を設置してわが国に対する侵略を本格的にほしいままにした。
2. 我が民族は、日帝の国権侵奪に対して義兵の救国抗戦、義士・烈士の義拳等国権守護運動を活発に展開してきた。
3. 義兵の救国抗戦は、乙巳条約の強制締結を前後して活発に展開されたが、大韓帝

国軍隊の強制解散後、義兵戦争に拡大された。

4. 侵略の元凶と売国奴たちを処断しようと、義士・烈士の義拳活動が国内外で相次いで起こったが、民族の正気を非常に高めた。
5. 日帝は、露・日戦争中に独島を不法に日本の領土に編入させ、清と間島条約を結んで我が民族の生活基盤であった間島を清に渡し与えた。

## 二. 結 語

以上、日本が韓国を「併合」する直前までの韓国の歴史と、その中に現れた日本の行動を見てきた。検討した対象が韓国の歴史であるから、日本の国内の事情については全く考慮されていないのはいたしかたないことであろう。「侵略の元凶」たる伊藤博文にしても、彼の主観では、侵略というよりは大日本帝国の保全と繁栄のために当然のことを行なったまでと考えていたであろう<sup>(12)</sup>。われわれは、明治維新以降の近代国家日本の形成の中で、朝鮮がどのような役割を負わされていたのかについて十分に教えられてこなかったし、また考える機会もあまりなかったように思う。日本の侵略を一方的に受けた韓国の歴史教科書は、われわれの近代史に対する認識を新たにしてくれる。

江華島事件以降の朝鮮・大韓帝国に対する日本の行為はいつも「侵略的」であり、相手に不利な条約を「強要」するものであった。規定の紙数が尽きたため、植民地時代（所謂日帝36年）のことがらについては検討できなかったが、「日韓併合」後の日本の行為は「侵略的」からさらに進んで「残酷」「過酷」なものになっていく。しかし、今回検討した範囲内では、日本の行為については冷静にかつ客観的に書かれていたといえる。厳密に言えば、江華島事件時と甲申政変時、乙巳事変時、日清戦争・日露戦争時の各段階における日本の朝鮮に対する侵略的行動の性格は異なっていたであろう。しかし、韓国側からみれば、日本の侵略的性格の質的差よりは、自国が侵略を受けたというその事実こそが重要なのであろう。「侵略」という言葉をみただけで、韓国においては偏った歴史教育が行なわれていると感じる日本人がいるかもしれないが、実際には極めて抑制の利いた記述態度で貫かれているのである。

韓国忠清北道天原郡にある独立記念館やソウル市にある独立公園の資料館の展示には、一人で見学にいった際、まわりにいる韓国人に自分が日本人であることがわかって欲しくないと思いたくなる内容のものがある。いや、回りに誰もいなくとも、日本人として直視するに忍び得ないものが多々ある。しかし、それらのことは、すべてかつて日本人が韓国において行なったことである。そのような歴史的事実を踏まえて記述された教書は、さぞかし日本に対して厳しい態度をとっているだろうと予測していたのであったが、実際には感情的な、あるいは反日教育を目的としていると考えられる記述はまったくといって良いほど見出せなかったのである<sup>(13)</sup>。

近世までの日本と朝鮮との関係は、時には戦もあったが、文化的政治的な関係が主流であっ

た。仏教に代表される古代文化、木綿、大藏経、陶磁器製造技術の伝来の中世、善隣外交を展開した近世というように。ところが近代になると、日本からは絶えず侵略の危機にさらされ続け、一時たりとも緊張が緩むことはなかったのである。朝鮮時代、大韓帝国時代を通じて、近代文明は主として日本を経由して伝えられた。科学技術、国制、鉄道、通信等も日本から導入されたものばかりであった。しかし、それらは日本からの恩恵とは考えられていないし、また実際そうではなかった。なぜなら、結果として朝鮮の近代化に貢献したかもしれないが、日本の目的はあくまでも朝鮮からより効果的に富を取奪するために、より強固に支配を貫徹させるために行なったものだったからである。

韓国の歴史教科書の近代の部分を読んでみると、日本に関する記述が客観的で、不法な行為に関しても抑制された表現が用いられていることを先に指摘した。記述は客観的ではあるが淡々としており、海ひとつ隔てただけの隣国に関するものとしてはいかにも寂しい。近代文化に導入に関しては「6. 近代文化の成長と愛国啓蒙運動」で説明されているが、日本に対しても好意的記述がなされることなど期待すべくもないことは、言うまでもない。

朝鮮に一步先んじて近代化に成功した日本が、韓国の教科書においては、一度として模範とすべき国として扱われていないことこそ注視すべきではなかろうか。韓国の教科書に書かれた日本の姿をこれまで追い求めてきたが、実は記述されていないことこそ重大なのである。

## おわりに

今回は、できるだけ教科書の文章を紹介することに努めた。日本に関する記述と、また韓国自身が、自分の国の歴史的弱点をどのように見ているかという点をできるだけありのまま知ってもらいたかったからである。

けれども、当然のことながら引用が多くなり、韓国の歴史の説明と私の考えを述べる場がなくなってしまった。いたずらに引用で紙数を費やしてしまっていて読みづらいものになってしまったことをおわび申し上げる。なお、末筆で失礼であるが、韓国の教科書を読むにあたって、本学外国語学部中国語学科の崔宰宇教授にいろいろと御教示をたまわった。ここに記して感謝します。

(1) 拙稿「韓国の国史科教科書にみる日本史(1)」(『聖徳学園岐阜教育大学紀要 15』1988年)

「韓国の国史科教科書にみる日本史(2)」(『聖徳学園岐阜教育大学紀要 17』1989年)

「韓国の国史科教育にみる日本史(3)」(『聖徳学園岐阜教育大学紀要 15』1990年)

(2) 例えば、最近朴泰嚇著『醜い韓国人 われわれは「日帝支配」を叫びすぎる』(光文社 1993.3)は、日本による植民地支配の時期をきわめて肯定的にとらえているが、この書物に対しては著者が韓国人にというのは偽りで、実際は日本人の評論家が韓国人の名をかたって書いたのだという非難が寄せられている。

(黄民基『醜い韓国人』を書いた『醜悪な日本人』(『月刊朝鮮』1993年8月号 朝鮮日報社)、加瀬英明「朴

## 韓国の歴史教科書にみる近代日本像(1)

泰嚇が私の本を一部引用した」(『月刊朝鮮』1993年9月号)、黄民基 「あなたは仮構の人物—『朴泰嚇』を公開することができないのか」(『月刊朝鮮』1993年9月号) この件に関しては未だ真相が明らかになっていないが、著者が日本人であれ(韓国人の名をかたったのだとすれば当然その卑劣さを問題にしなければならぬ)、韓国人であれ、植民地支配を肯定的に語ることにについては困難な状況にあるといえる。

- (3) 李明花 「日本歴史教科書 韓国史記述韓国史像」(『韓国独立運動史研究』第一集 独立記念館韓国独立運動史研究所 1987年)
- (4) 版形がいつ大きくなったかは未確認だが、1990年版ではすでに大型化していた。記述内容は、1987年版と1990年版とでは大きく異なっているが、1990年版と1993年版とは、未だ詳細な比較はしていないが、ほぼ同じである。口絵写真も大幅に差し替えられている。1987年版では、李朝時代の青絵青磁、雅楽の演奏風景、仮面劇の仮面、朝鮮時代の絵画、木工芸品であったが、1990年版・1993年版では、青絵青磁、景福宮内の勤正殿、朝鮮時代の絵画、独立記念館、ソウルオリンピックの開幕式である。勤正殿の写真に一ページすべてつかってあること、独立記念館の写真を入れてあることに、自国の伝統の尊重と近代における苦難の歴史及び独立運動を重視する姿勢が、オリンピックの開幕式の写真に現代の経済的発展と国際社会における韓国の地位向上が表現されているように思われる。
- (5) 興宣大院君について、我が国では、教科書をはじめとして一般には単に「大院君」と呼びならわされている。しかし、大院君というのは、「李朝時代、王位の継承において、王が兄弟や子孫がなくして死んだので王族の中から王位継承をする場合、その王の生父を大院君といった」(李弘植編 『増補 州國史事典』教学社) のであり、史上何人かの「大院君」が存在したのであるから、小稿では韓国の教科書にならって「興宣大院君」を用いた。
- (6) 日本では、教科書をはじめとして一般に日朝修好条規(古い教科書では「日鮮修好条規」と表記していた)の用語が使用され、時に「日韓修好条規」「江華条約」の名称も使用される。韓国では、中学校、高等学校の教科書がともに「江華島条約」とよんでいる。注(5)引用の『州國史事典』は、「江華島条約」で項目を立て、「丙子修好条約」「韓日修好条約」の別名があると述べている。また、1979年出版の一冊本の韓国史通史『韓国 歴史』(河炫綱著)は「丙子修好条約」とよび、『韓国史市民講座』第7集(一潮閣、1990年)の特集「開化期 自主と外圧の葛藤」に収められた諸論文は「江華条約」を用いている。また、『独立記念館展示品図録』は、「江華島条約(日朝修好条規)」として解説している。憶測が過ぎるかもしれないが、総じて韓国では「修好」のもつ欺瞞性を嫌っているように思える。
- (7) 高等学校の教科書になると、中学校の教科書よりさらに小さな活字を用いて4ページにわたって東学農民運動について記述している。運動の指導者全琿準の檄文、弊政改革12条の二つの史料、東学の教勢拡張と東学農民運動の展開を示す2葉の地図も添えられている。
- (8) 閔妃殺害については、角田房子氏が当時の朝鮮宮廷内の事情や国際関係、事件にかかわった日本人たちの動向について詳しく述べられている。(角田房子 『閔妃暗殺』新潮社 1988年、後新潮文庫に収録)
- (9) 朝鮮は、1897年10月に自主独立の国であることを示すために国王(高宗)が皇帝に即位するとともに、国号を大韓帝国とし、年号を光武とした。閔妃は乙未事変の時には王妃であったが、明成皇后の称号が追贈されたため教科書ではこのように記している。
- (10) 中学校世界史教科書が手元にないので、高等学校用世界史教科書(1988年版 オインソク、キム キュホ作 『世界史』東亜出版社)を見たところ、「清日・露日戦争」という小見出しのもと1ページ弱の分量で簡単に触れられているだけである。日本にとっては、近代になって初めて経験した対外戦争であったが、韓国にとっては日本と清国という二つの外国が戦った戦争であったということで、特別な関心がないということであろうか。

- (11) 1986年版の教科書では、93年版とよく似た文章が書かれているが、細部では異なる部分が多い。張志淵の論説「是日也放聲大哭」については、この論説を掲載した皇城新聞が無期停刊にされたことが書かれている。また、乙巳条約に反対して自ら命を立った殉国者の記述も詳しく、閔泳渙の殉国も93年版の2行分に比して9行が費やされて、殉国の様子や彼の殉国が国民に与えた影響を詳しくといている。さらに、乙巳条約に賛成した5人の大臣たちを「乙巳五賊」と呼ぶが、この五賊暗殺団が組織されたことなども述べられていて、韓国民の乙巳条約に対する反感を強調した書き方になっている（1993年版では、乙巳五賊は「義拳活動」の項に移されている）。
- 自国の事柄についても、より客観的な記述態度がとられていきつつあるようである（五賊、売国奴などの感情的表現が一部に見られるが）。韓国の教科書の刊行時期の違いと記述の関連については、今は検討するだけの力がないので、後日を期したい。
- (12) 1979年に朝鮮民主主義人民共和国で製作された映画「安重根、伊藤博文を撃つ」では、ハルビンに向かう列車の中で伊藤博文に「ロシアとの交渉がうまくいけば、これで自分が大日本帝国のために成すべきことはすべて成し遂げたことになる」という意味の台詞を語らせていた。北朝鮮の歴史教科書の検討は教科書入手が困難であるために未だなしえていない。したがって北朝鮮の教育現場での近代日本の取り扱い方については全く未知であるが、一般国民の歴史意識形成に影響力をもつと思われる映画では、乙巳条約強要の場面であれほど朝鮮の主権を踏みにじった極悪人として描かれていた伊藤博文に対する個人攻撃ではなくて、大日本帝国の臣民たる伊藤博文というとらえかたをしていた点に興味を感じた。なお、韓国でも1972年に「義士安重根」という映画が製作されたそうであるが、まだみる機会がない。
- (13) 韓国における歴史教育が反日教育を目指したものではないことについては、高崎宗司氏が、高等学校用国史教科書の記述の検討を通して確認されている。（高崎宗司『『反日感情』韓国・朝鮮人と日本人』講談社現代新書 1158 1993年）